

## 目の力

松本 侑壬子・ジャーナリスト

今年のワールドカップサッカーは、さすがにスポーツ音痴の私でも興奮させられた。世界一を争うゲームを見ていると、目が肥える。TV画面に向かって、偉そうに指令を出したり、褒めたりけなししたり、叫んだり。

やったこともないサッカーにこれだけ夢中になれるのは、解説や実況中継を聴き、会場の雰囲気も聞こえてくるからだ。目が肥えるとは、耳の助けがあってこそ…。

女子サッカー選手たちを追うこの映画には、こんなことに気づかせるすばらしい言葉がいたるところに光っている。選手らは、サッカーが大好きなスポーツウーマンだが、全員ろう（耳が聞こえない／難聴）である。彼女らの視点からの言葉が新鮮なのは、日常生活の中で聴く・聞くということの意味を改めて考えさせてくれるからだろう。

「健聴者（耳の聞こえる人）は、相手の顔を見て話さない。（理解しようと）じっと見て話そうとすると、見ないでくれと言われる」などと聞くと、日本的コミュニケーションのあり方への鋭い指摘だと思いついたりもする。

この映画は、2009年夏に台北で開かれた第21回夏季デフリンピックに初出場した「ろう者女子サッカー日本代表チーム」の群像であり、一人ひとりの人間ドラマである。10歳代の高校

生から30歳代の社会人や既婚者まで、世界のひのき舞台をめざして合宿、激しい訓練を経て、どんな闘いを展開し、何を得たのか一。

彼女らは負けて初めて悔し泣きをしたという。「それまで、試合には負けるのが当たり前で、悔しいなんて思わなかったから」それが、世界を相手の闘いを通して自分を知り、目標に向かって自らつかみ取ったもの。その核心の一つが「アイ・コンタクト」だ。目と目で意思や感情を伝えあうこと。「うまくいかないみんな下を向いちゃう。下見ても何もわからない、声は聞こえないんだから。ダメなら余計に顔を上げて、目と目で確認しなきゃ」と。アイ・コンタクトは、健聴者にとっても重要な非言語コミュニケーションだ。まして彼女らにとっては、目こそ力なのだ。

選手らはもちろん、家族から教育問題の歩みまで、今、ろう者を取り巻く問題は広くて深い。中村監督は、映画を撮りたいと思った時からまず手話を学び始めたという。＜声が出せない＝静かな人＞との先入観は、手話を覚えるにつれて覆されていった。なんておしゃべりで、ユーモラスで個性豊かな女性たちなんだ、と。実際、字幕で表示される彼女らの言葉は、明るく率直、そして実に説得力がある。聞こえないということはどういうことなのか、聞こえなくてもどのようにすれば大丈夫なのかと。

監督の優しく的確な視線が、見る者を多様なろうの世界へと導く。そして、気がつくワールドカップサッカーに劣らぬ熱い視線を、個性豊かでチャーミングな頑張り屋のろう者女子サッカー選手たちに送っている自分がいる。

## 『アイ・コンタクト』

もう1つのなでしこジャパン ろう者女子サッカー

ドキュメンタリー映画（88分）／中村和彦監督

上映情報：<http://www.pan-dora.co.jp>（録バンドラ）

© 撮影：葛尾優子

